

【 設問アプローチ 】

[19 - A]

問1 : ① [設問チェック] 傍線部の語句の、反対の意味の選択肢を選ぶ。

② [アプローチ] 自分の語句知識と、本文読解中に傍線部前後の文脈から読み取った傍線部の意味内容を総合して、傍線部の語句の本分における意味を推測する。

③ [設問読解] ②を踏まえて、選択肢から反対の意味になる語句を、解答として選ぶ。

問2 : ① [設問チェック] 傍線部の語句について、本文中の意味が問われている。

② [アプローチ] 自分の語句知識と、本文読解中に傍線部前後の文脈から読み取った傍線部の意味内容を総合して、傍線部の語句の本分における意味を推測する。

③ [設問読解] ②を踏まえて、傍線部の語句の意味内容を適切に説明した選択肢を吟味する。

問3 : ① [設問チェック] 傍線部の内容説明が求められている問題。

② [本文読解] 本文読解によって、傍線部の内容を理解する。

(1) 傍線部を含む1文に、「また逆の場合も同様である」とあることから、その「逆」の内容が論じられている部分を確認する。

→ 4～6行目が、1つめの《根拠》になる。

(2) 傍線部の次の1文に、「すなわち」がある。

→ この部分の内容が、傍線部の内容を言い換えて説明した部分であると考えられるので、2つめの《根拠》にする。

③ [判断基準] ②で確認した2つの《根拠》をもとに、内容のポイントを押さえる。

→ 「数学から文学に移行するのは、難しい」という内容を説明した選択肢を吟味する。

問4 : ① [設問チェック] 傍線部のように、筆者が考えた理由が問われている。

② [本文読解] 読解を通して、傍線部についての内容説明は傍線部以降の部分にあることが〈予測〉される。 → 該当する内容は13～20行目にあるので、この範囲を《根拠》にする。

③ [判断基準] ②で確認した《根拠》の中から、文章の語尾に注目し「筆者の主張」を読み取る。また論理語にも注目し、その内容の要点を把握して、選択肢を吟味する(基準)にする。

問5 : ① [設問チェック] 傍線部についての筆者の考えが尋ねられている。

- ② [本文読解] 傍線部の次の一文に、「落胆を禁じ得なかった」という内容がある。
 ここから、なぜ筆者は「落胆を禁じ得なかった」のかを本文中から明らかにする必要性があり、その内容が、この一文以降の範囲にあることを〈予測〉する。
- ③ [判断基準] ②から、29行目以降の内容を確認すると、ここに筆者が「落胆を禁じ得なかった」理由と筆者の考えが示されている。

]

→ 29行目から37行目までの内容を《根拠》とし、その範囲の内容と「筆者の主張」を踏まえて、解答となる選択肢を吟味する。

問6 : ① [設問チェック + アプローチ] 本文中から、「文学者」と「数学者」の内容を確認し、傍線部の意味内容を考える。

② [本文読解] 39行目に「数学者が」とあるように、4段落は主に「数学者」について説明した部分。一方、「文学者」については3段落にその内容があり、特に13行目～20行目の辺りに、その特徴に関してポイントとなる内容が論じられている。

③ [判断基準] 「文学者」、「数学者」それぞれの特徴を論じた部分を《根拠》とし、その内容をそれぞれ整理した上で対比し、傍線部の意味内容を考える。

→ ポイントは「有限」と「無限」の対比、また研究の対象が「内」にあるか「外」にあるかの違いになる。以上のポイントを押さえて、本文の内容を適切に説明した選択肢を、解答として選ぶ。

問7 : ① [アプローチ] X, Yに当てはまる語句を、それぞれ文脈から推測する。

② [本文読解] (1 - Xの読解 -) 空欄を含む一文、そしてそれに続く一文は「Aではなく、むしろB」構文になっている。この構文を利用して、空欄に当てはまる語句を考える。

→ この構文が用いられている部分、もしくは4段落全体は、問6でも確認したように、「数学者」についての内容が「文学者」との対比によって説明されている。

構文が使われている部分でも、数学者の「無限」の内容に対して空欄の内容があり、またこの空欄は「有限な人生に起因するところの」に続く内容としてあることが確認されるので、この空欄には「文学者」に関する内容が当てはまることが分かる。

(2 - Yの読解 -) 空欄を含む一文は、「Aではなく、B」構文の変形パターンとして考えられる。ここでは、「AといえばBではなく、C」という形になっているので、この構文から空欄の内容を考える。

③ [判断基準] (1 - Xの《根拠》 -) ②から、「文学者」について論じられた3段落の内容を確認する。
 16行目に「すなわち、文学の中心的なテーマである」というフレーズに続いて「人間の情緒」というキーワードがあるので、この内容を《根拠》とする。

(2 - Yの《根拠》 -) 空欄は、「技術的」と同じようなニュアンスを持ち、かつ「質変換」と対置される内容であると考えられる。

→ ここから、選択肢を吟味すると「技術 ≡ 方法」、「変換 ≡ 転換」と考えられるので「イ」を選ぶ。

問 8 : ① [設問チェック + アプローチ] 設問文から本文全体に関する内容の設問であること、そして第二段落の役割について答える設問であることを確認する。
→ 予め2段落にチェックを入れておき、設問に関する内容であることを押さえておく。

② [本文読解] 本文読解を通して、2段落の最終2文に注目する。
この2文には、ここまでの本分の内容を踏まえて、ここから「新たな筆者の考え」について考察していくことを示す内容になっている。

③ [判断基準] ②で確認した内容を踏まえて、その内容を適切に説明した選択肢を吟味する。

問 9 : ① [設問チェック + アプローチ] 設問文から、本文全体の内容に関する問題であることを確認する。
→ 選択肢文のキーワードを予めチェックしておく。

② [判断基準] 本文読解中に本文中にチェックした内容と、選択肢文のキーワードを照らし合わせて解答を出す。